
パパと彼女とそれから私

はるママっぴ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パパと彼女とそれから私

【Nコード】

N67040

【作者名】

はるママっぴ

【あらすじ】

あれから9年、何処へ行ったの？私の心。迷子の私の心、探しています。

くピースと心の行方

あの時、私は壊れた。

1F台所から包丁と果物ナイフを持って2Fへ駆け上がった。

両手に包丁を持ち、パパに突き付けたのだ。

映画やドラマの映像を見ている様な光景。

そんな事が私の身に、私の人生に起こるだなんて…。

結婚11年、私33歳、パパ33歳、長女11歳、長男7歳、次女

5歳、どこにでもいるごく普通の家族。

特別『幸せ』と思う事はなかった。

でも、今みたいに『幸せになりたい』と強く強く願う事がなかった分、幸せだったに違いない。

彼女の存在が見え始めるまでは…。

再会

2001・10

その年の6月に色々な企業のある活動で出会ったパパと彼女は、1

0月に偶然の再会をした。（…らしい）

パパは10月の後半から土日度の度に家を留守にした。

毎回、嘘の予定を言って出掛けた。

11月、残業や徹夜（明け方帰って来る）、休日出勤が多くなり、

飲み会も多くなった。（嘘のね）

末日になるととうとう帰らない事もあった。

仕事だ、残業だ、徹夜だ、休出だ、飲み会だ、会社の付き合いだっ

て、パパは沢山の嘘を並べた。

私は残業や休出した事を証明する書類を会社から持って帰る様に言った。

『俺の事信じてないんだな』『結局は俺の事、愛してないんだな』
何か言って詰め寄られると決まって言う、パパの捨てゼリフだった。
その頃、そんな捨てゼリフを吐いて、時には殴る蹴るの暴力をふる
って、深夜でも家を飛び出して行く事が度々あった。
でも、今日はいつもと違った。
今日は私が壊れ始めた日…。
包丁を突き付けた日…。
あの日から私は壊れ始めたんだ。

突き付けた包丁は、同居している私の母親に取り上げられた。
子供達は別の部屋で震えていた。

パパは家を飛び出して行った。

『パパには別に居場所があるんだ…』

辛くて悲しくて情けなくて、泣いて震えている私を、もう一人の私
が別の角度から心配そうに、それでいて冷静に見ていた。

『ある日のパパへのメールより』

ピアスが片方なくなってしまうました。パパに殴られる度、ピアス
が片方なくなってしまうます。

心がなくなってしまうました。

パパに殴られる度、心が一つずつなくなってしまうます。

く吸い殻と雪景色（前書き）

携帯電話

たまにきちんと帰った日には、子供達が眠りについた後、私はパパと話をした。

私はきちんと向き合って話したいのに、パパはしばらくするとすぐ眠ってしまう。

幾度もそんな事があった後、初めてパパの携帯を勝手に見た事があった。

その時、ちょうど電話が鳴った。

着信は『松本』

電話には出ず、電話を乱暴に切り、私は受信メールを見た。

そこには『松本』からのメールが沢山あった。

メールを見て、分かったのは単語のみ。

どんな内容のメールだったか、その時、理解出来なかった。

と、言うより頭に入らない状態だった。

今も全く思い出せない。

『たーくん』『飛行機』『北海道』『無印パン』『銀行』

電話帳で携帯番号を調べるでもなく、メールアドレス控えるでもなく、何が何だか分からないまま、携帯を握りしめ、眠っているパパに詰め寄った。

パパは又、その場しのぎの適当な嘘を言った。

その後の事は全く覚えていない…。

記憶が飛んでいます。

色々な事がありすぎて覚えていません。

ただ一つ覚えているのは、その後、家の車に乗った時、私のじゃない、パパのじゃない、口紅の付いたメンソールの煙草の吸い殻が灰皿にあった…覚えてるのは、それだけ…。パパが私に気付かれな

い様に、灰皿の奥の方によけていた…覚えてるのは、それだけ…。

講習会

しばらくしてパパは、転職の為、講習会に参加すると、仙台へ行った。

会社を休んで5泊6日です。

その間にパパの誕生日がありました。

何も語れません。

後からその時の事実を知って、虚しかっただけ…

看護師の彼女が、助産師にステップアップする為の、学校の入試試験だった。

それにパパも付いて行った。

どこまで、私をバカにするのでしょうか。

又、一つ心がなくなってしまうました。

「誕生日のメールのやりとり」

お誕生日おめでとう。

ありがとう。

こちらは、電車から見える雪景色、とても綺麗です。

く吸い殻と雪景色く

あの時、私は壊れた。

1F台所から包丁と果物ナイフを持って2Fへ駆け上がった。

両手に包丁を持ち、パパに突き付けたのだ。

映画やドラマの映像を見ている様な光景。

そんな事が私の身に、私の人生に起こるだなんて…。

結婚11年、私33歳、パパ33歳、長女11歳、長男7歳、次女5歳、どこにでもいるごく普通の家族。

特別『幸せ』と思う事はなかった。

でも、今みたいに『幸せになりたい』と強く強く願う事がなかった分、幸せだったに違いない。

彼女の存在が見え始めるまでは…。

再会

2001・10

その年の6月に色々な企業のある活動で出会ったパパと彼女は、10月に偶然の再会をした。（…らしい）

パパは10月の後半から土日度の度に家を留守にした。

毎回、嘘の予定を言って出掛けた。

11月、残業や徹夜（明け方帰って来る）、休日出勤が多くなり、飲み会も多くなった。（嘘のね）

末日になるととうとう帰らない事もあった。

仕事だ、残業だ、徹夜だ、休出だ、飲み会だ、会社の付き合いだつて、パパは沢山の嘘を並べた。

私は残業や休出した事を証明する書類を会社から持って帰る様に言った。

『俺の事信じてないんだな』『結局は俺の事、愛してないんだな』
何か言って詰め寄られると決まって言う、パパの捨てゼリフだった。
その頃、そんな捨てゼリフを吐いて、時には殴る蹴るの暴力をふる
って、深夜でも家を飛び出して行く事が度々あった。
でも、今日はいつもと違った。
今日は私が壊れ始めた日…。
包丁を突き付けた日…。
あの日から私は壊れ始めたんだ。

突き付けた包丁は、同居している私の母親に取り上げられた。
子供達は別の部屋で震えていた。

パパは家を飛び出して行った。

『パパには別に居場所があるんだ…』

辛くて悲しくて情けなくて、泣いて震えている私を、もう一人の私
が別の角度から心配そうに、それでいて冷静に見ていた。

『ある日のパパへのメールより』

ピアスが片方なくなってしまうました。パパに殴られる度、ピアス
が片方なくなってしまうます。

心がなくなってしまうました。

パパに殴られる度、心が一つずつなくなってしまうます。

真夜中の電話

たまにきちんと帰った日には、子供達が眠りについた後、私はパパ
と話をした。

私はきちんと向き合って話したいのに、パパはすぐ眠ってしまう。
幾度もそんな事があった後、初めてパパの携帯を勝手に見た事があ
った。

その時、ちょうど電話が鳴った。

着信は『松本』

電話には出ず、電話を切り、私は受信メールを見た。

そこには『松本』からのメールが沢山あった。

メールを見て、覚えているのは単語のみ。

『たーくん』『飛行機』『無印パン』『銀行』

何が何だか分からないまま、携帯を握りしめ、眠っているパパに詰め寄った。

パパは又、その場しのぎの適当な嘘を言った。

く嘘の別れと本当の別れく（前書き）

嘘ばかりついていたパパが初めて本当の事を言った。

彼女の存在を認めたのだ。

でも、それは次の嘘をつく為に必要な『本当』だったのだ。

誰にでも分かる『本当』と『嘘』だった。

『彼女とは別れる』

そして、続けて私にこう言った。

『距離を置こう』 『一人になって考えたい』

バカバカしいお話で、本当に大バカとしか思えなかった。

勝手に出て行け。

そして、彼女の所に行け。

次の日、私はパパの会社の駐車場に行った。

合鍵で車を開け、車中を探って何か私の為になる様な物を探した。

離婚調停の際に役立つと思われる物があるかも知れない…。

彼女の住所と、携帯番号が分かる郵便物の控えを見つけた。

灰皿には口紅の付いた、メンソールの煙草の吸い殻が、又、沢山あった…。

私はその足で、その住所の家を探しに行った。

その夜遅く、もう一度、その住所の家のすぐ近くまで行った。

近くの道にはうちの車が路駐されていた。

次の日、昼休みを狙ってパパの会社の近くにパパを呼び出した。

家の場所を突き止めた事、車があった事、仙台の学校に送った現金書留（入学金？）の控えを見つけた事、5泊6日の仙台への講習会は、彼女の学校入試だったんじゃないかって事…。

全て認めて、パパは言った。

『4月には仙台の学校に通う様になるから、それまでは一緒にいたい』

又、バカにれた瞬間だった。
又、心が粉々になった。

それから毎夜毎夜、彼女の家の前まで行き、
路駐されているうちの
車を見に行くのが、私の日課になった。
毎日、一つずつ心がなくなっていく。

一体、心はいくつあるのだろうか？

く嘘の別れと本当の別れく

嘘ばかりついていたパパが初めて本当の事を言った。

彼女の存在を認めたのだ。

でも、それは次の嘘をつく為に必要な『本当』だったのだ。

誰にでも分かる『本当』と『嘘』だった。

『彼女とは別れる』

そして、続けて私にこう言った。

『距離を置こう』 『一人になって考えたい』

バカバカしいお話で、本当に大バカとしか思えなかった。

勝手に出て行け。

そして、彼女の所に行け。

次の日、私はパパの会社の駐車場に行った。

合鍵で車を開け、車中を探って何か私の為になる様な物を探した。

離婚調停の際に役立つと思われる物があるかも知れない…。

彼女の住所と、携帯番号が分かる郵便物の控えを見つけた。

灰皿には口紅の付いた、メンソールの煙草の吸い殻が、又、沢山あった…。

私はその足で、その住所の家を探しに行った。

その夜遅く、もう一度、その住所の家のすぐ近くまで行った。

近くの道にはうちの車が路駐されていた。

次の日、昼休みを狙ってパパの会社の近くにパパを呼び出した。

家の場所を突き止めた事、車があった事、仙台の学校に送った現金書留（入学金？）の控えを見つけた事、5泊6日の仙台への講習会は、彼女の学校入試だったんじゃないかって事…。

全て認めて、パパは言った。

『4月には仙台の学校に通う様になるから、それまでは一緒にいたい』

又、バカにれた瞬間だった。
又、心が粉々になった。

それから毎夜毎夜、彼女の家の前まで行き、
路駐されているうちの
車を見に行くのが、私の日課になった。
毎日、一つずつ心がなくなっていく。

一体、心はいくつあるのだろうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6704o/>

パパと彼女とそれから私

2010年11月3日13時55分発行